



北海道遺産・北見市指定文化財

ピアソン記念館

第103号

ピアソン便り

2022. 3. 31

発行人：福井 洋之（理事長） 編集人：伊藤 悟（理事）

NPO 法人ピアソン会事務局

（事務局長 伊藤 悟）

〒090-0036

北見市幸町7丁目4番28号

Tel. FAX 0157-31-1215

ピアソン記念館内

午前9:30～午後4:30

e-mail アドレス

pierson@yacht.ocn.ne.jp

【写真右】寄贈された資料10箱を整理のための準備。

【写真下】特注展示ケースの図面（展示台と文献収納本箱）。



【写真下】寄贈品の目録データ入力作業。展示会後、ピアソン会HPにて公開予定です。



唐笠何蝶記念室「寄贈資料公開」展の開催！
ピアソン便り第九八号（2021年5月発行）で報告の月刊俳誌「阿寒」一七七号まで、また第一〇〇号（2021年9月発行）で報告の額装短冊6点に加え、昨年11月末、俳句に関する貴重な文献百十二点、さらに今年の一には、唐笠何蝶、嶋田摩耶子、嶋田一步の俳句推敲の生原稿など、嶋田言一氏（唐笠何蝶のお孫さん）よりピアソン会に寄贈された資料を、「唐笠何蝶記念室」に新たにに加え常設展示資料として公開することとなりました。

現在、それらの資料公開（額装短冊6点は公開済み）のための準備作業に加え、特注の展示用ケースを4台製作中です。

「寄贈資料公開」展は、4月29日からの開催を予定しています。

月刊俳誌「阿寒」は一年分が合本されており、昭和21年から昭和36年までの十六年分百七十七冊が16巻として合本整理されています。額装短冊は六点壁面に展示しています。さらに生原稿は、整理してあるファイル毎展示ケースにての公開となります。俳句関係本等のその他資料は、ピアソン会理事で分類整理中！

企画展
参考記事

ピアソン邸が柏樹荘と呼ばれた時代

ピアソン邸が唐笠学医師によって買い取られたのは、昭和14年10月との記録がある。軍部より「かつてアメリカ人の住んでいた家を壊せ！」との圧力からピアソン邸を守るためであったと言われていた。唐笠医師はピアソン邸を戦時中は住居として使用し、戦後の昭和20年から26年まで、「柏樹荘」という呼び名で、北見に於ける各種文化活動の拠点として使用していた。柏樹荘が『北見における戦後文芸活動の中心・魁的な役割を果たしていた』、と言っても過言ではない。

北見の郷土史家故菅原政雄氏による「北見の文学物語」に、次のような説明文がある。

《戦後北見から出され、北海道ホトトギス系俳壇をリードするに至った月刊俳誌「阿寒」の創刊は、昭和二十一年（一九四六）年二月です。

戦中、軍や官憲の抑圧もあって、表向き久しく鳴りをひそめていた北見俳句界でしたが、昭和十八年北海道で初めて「ホトトギス」の巻頭をかざって人々を驚かせた吉岡秋帆影をはじめ、俳句の研究は宮々と続けられておりました。

戦後唐笠何蝶の従弟山下武平が海軍から復員して北見に落ち着くと、山

下武平、吉岡秋帆影、田丸柿山寺、横山圭洞、青葉三角草、安藤蟹平らが、唐笠何蝶が柏樹荘と名づけたピアソンの旧居に集まって、しきりに句会を開くようになります。こうした人々の俳句に対する強い情熱、互いにみなぎる敗戦後の使命感、精神復興、文化復興のねがいの高まる中で、唐笠何蝶を立てて俳誌を発行しようという気運が盛り上がってきました。そして昭和二十（一九四五）年十一月第一金曜日夜の句会の席で「阿寒」発行の議はまとまったのでした。《編集室は、旧ピアソン邸の『柏樹荘』に置かれ、編集職員も雇われし月刊誌として出版するための準備は整った。》

《こうして「阿寒」は、題字と巻頭句に高浜虚子、表紙絵に高野素十夫人高野富士子、俳文に山口青柳、佐藤謙人、比良暮雪、河野広道など、選には松本たかしと唐

笠何蝶があたつての、華々しい刊となりました。そして「阿寒」は、北見地方を中心に全道、更に全国、在外邦人からも句を集めながら、「敗戦によって壊滅した祖国の精神復興のために、いささかながら一つの役割を果し」略

俳句誌「阿寒」からの情報



右の号の表紙絵は、芋版画家の香川軍男氏のものである。表紙絵は半年ごとに変えていたようであるが、題字の「阿寒」は、高浜虚子の筆で、終始替わらなかつた。

下欄右にあるのは「阿寒」の編集後記にあたる「消息」欄である。内容は、旧ピアノン邸の当時柏樹荘に、メレル・ヴォーリス（日本名一柳米来留）が来た事が書かれている。1950（昭和25）年11月1日発行の号である。

この「消息」欄によって、昭和

消息 何蝶
この二十一日、又上せねばなりません。この二十一日、又上せねばなりません。この二十一日、又上せねばなりません。...

25年10月にヴォーリスが、旧ピアノン邸を訪問していた事が判明している。これを元にヴォーリスが発行している『湖畔の声』を調査してみると、この時期に北海道への旅行記が掲載されており、何の目的で北海道旅行に來たのか、また何故北見に立ち寄ったのかも理解する事が出来た。...

ピアノン邸の変遷

ピアノン邸は、大きく四つの時代に区分される。

- 一番目は、勿論ピアノン夫妻が居住していた、1914（大正3）年から1928（昭和3）年まで。二番目は、1939（昭和14）年から1951（昭和26）年まで

の柏樹荘と呼ばれた時代。唐笠医師の、『ピアノン邸を後世に残す』という強い意思がなければ、恐らくピアノン邸が現在まで残されることは無かつたと思われる。三番目は、1952（昭和27）年から1963（昭和38）年まで北海道北見児童相談所としての使用。唐笠医師が北見を離れるに際して、『個人で所有している、後世にこの建物を残すことが困難』と考へ、『ピアノン邸を残すことを条件に北海道に寄贈した』と伝えられている。

【写真】記事とは直接の関係はありませんが、晩年のフィラデルフィアでの二人。（写真集「ピアノン夫妻の足跡」より）
『クリスチャニティ・トゥデイ』誌（註1）に掲載された夫人の追悼記事
ジョージ・ベック・ピアノン氏の夫人
三月十二日金曜日の早朝に、ピアノン夫人は、主に召され、主とともに喜ぶために旅立ちました。ほとんどの期間長老派に所属し海外伝道局派遣宣教師として日本で伝道活動に従事して四〇年を過ぎたのち（帰国し）、ピアノン博士と夫人は、フィラデルフィアに移り居を構えました。それはウエストミンスター神学校（註2）が（フィラデルフィアに）創設されたすぐ後のことです。ピアノン夫人は本誌の「伝道団」ページの執筆者として一年以上担当していたので、お名前を覚えておりました。...



投稿
ピアノン夫人忌
三月十二日
文責：北原俊之

信仰への思いが彼女を海外宣教師に駆り立てました。当初はアフリカへ行くことを希望していましたが、聖公会伝道局の要請に従い日本に行くことになり、一八九〇年から、東京のセント・マーガレット女学校で教師を数年つとめ、そののちに、田舎の伝道に身を投じて福島という地域で伝道活動をしました。

一八九五年、彼女はジョージ・P・ピアソン牧師と結婚し、夫とともに北海道に渡りましたが、その北海道の地で、彼女の情熱あふれる先駆的な取り組みが多方面にわたって様々な成果をもたらしました。夫人は、一九二八年に「海外派遣宣教師の任期を全うし」退職してフィラデルフィアに居住し、この地にあるウエストミンスター神学校に長期にわたり通い、改めて学び直すことに無上の喜びを感じていました。また、この地のジャーマンタウン「歴史的ドイツ人地区」にあるマウント・エアリー長老教会(註3)で女性向けバイブル・クラス(聖書講読)を三年間担当し、どうしても体調が不良で動けないことがない限りは、かけがえのない貴重な榮譽ある仕事を中断することはありませんでした。「かつて」夫人の父親は、彼女が知性豊かな人物であると語っていましたが、四二年間共に生活してきた筆者「私」にとつて、このことが強

く心に残っております。

ミセス・ピアソンは、書籍、新聞・定期刊行物、論文・レポートなど飽くことなく読みました。いつも屋過ぎになると三冊から五冊の本の山に囲まれてうたた寝をしていました。でも、いつも欠かさなかったのは聖書と祈りでした。聖書は彼女の血となり肉となりまた喜びでした。彼女は、「何事にも」聖書の章と節番号を示すことを心がけていました。彼女が作っていた「祈り」についてのノートには、左ページに「神への」とりなし、「人のための神への祈り」を示し、右ページに、そこから読み取れる主の御言葉・御業が記述される形になっていました。一九三七年中に出版される「であろう」彼女の書籍(註4)には、二〇四の「とりなし」の祈りが記述されています。これらの「とりなし」の祈りは、週ごとに割り振られ、各曜日に何かしらの関連を持たせるよう入念に配置されています。バイブルクラスで教えるための準備では、彼女は、土曜日を一日かけてまるで祈りを捧げるように聖書を「独力で」研究して、註釈(本)は「ほとんど参考にする事なく」事後に目を通すくらいにしています。彼女は、いいかげんさ、適当さが大嫌いでした。教える内容のなかで、端々で見ている者にとつてささやかな事柄に思われることにもこだわるといふ彼女の細かさを目のあた

りにすることはとても驚きました。このような資質をそなえており、さらに、聖書は聖霊が著者であるから主の御力添えによりその内容を解釈できるのであるという絶対的な確信をもっているからこそ、彼女は、日本でも「米国フィラデルフィアの」ジャーマンタウンでも皆から愛される、信頼ある、誠実な、指導力ある教師となったのです。この先、時を経ると、彼女の宣教師としての行いは忘れられるかもしれませんが、彼女が拠点とした地域で取り組んだ、救済事業、病院での世話、スラム街での日曜学校などの社会奉仕、そして雑役婦からオルガンスト、(求められても説教壇に立つことは固辞しましたが)説教者まで何でもやったことなども、彼女の考え方・判断の筋の通った堅実さがあり、彼女の情緒・感情は鋭く反応し、彼女の活動・働きは根気強く疲れを知らないものでしたが、…。そのような七五年間休むことなく全身全霊を傾けた献身・奉仕は、無になつてしまふのでしょうか。否、そうではなく、むしろ、終わることのない発展のなかで価値あるものを生み出し続けます。それは「聖書の中で主が語っているように」あなたの実は残り続ける」(ヨハネ 15:16) のため。

Obituary: Ida Goepf Pierson:

Christianity Today: April 1937:

p.285

参考記事

『求めよ、さらば、与えられん』序文から抜粋

(前略) ほぼ四〇年間にわたり海外で宣教師として活動した中で、祈りに対する彼女の信念のありようが試され評価を受けたことで、友人たちからの熱心な要望もあり、この本の著者は、このような研究を書物にしました。

彼女の健康状態(が悪化したこと)と彼女なりの最終的、決定的な解釈、説明(に時間がかかったこと)のために、彼女が原稿を最終段階まで完成させることができたのは、旧約聖書部分まで、残りの新約聖書部分の彼女の残したメモを最終段階までに仕上げる作業は、悲しくもうれしくも夫である私が引き受けざるをえないことになってしまいました。「祈りは、本質的には、主に對して公式に回答を求めて申し立てることをテーマにした彼女の原典資料集である本書の中で、「彼女は死んだが、信仰によってまだ語っている」のです。彼女が語っているのは、「祈りなさい!」ということです。(後略) G・P・P

■本文中の註釈

註1 Christianity Today ウェストミンスター神学校を牙城とする正統長老派教会が発行する機関誌。

註2 Westminster [Theological] Seminary [Philadelphia] ウェストミンスター神学校。プリンストン神学校の保守派がフィラデルフィアに創設した。

註3 Mt. Airy Presbyterian Church

註4 Ask and it shall be given 『求めよさらば、与えられん』アイダ夫人の遺作。ピアソン宣教師が完成出版させた。(ピアソン記念館収蔵)

広告見本

年6回掲載で、
年額 10,000 円です。

3 cm × 5 cm
この大きさが
原寸大です

教会創立 1900 年

日本キリスト教会 北見教会

主日礼拝・毎週日曜 午前 10 時 15 分

牧師 森下一彦 (学校法人 ピアソン学園北見幼稚園理事長)

〒 090-0035 北見市北斗町 2 丁目 1-30

TEL/Fax 0157-23-3361 e-mail k.mori64@outlook.jp



「ニュージーランドからの便り」第32回



ピアソン会顧問 グラハム・ハード氏

2022.1.29

―夏の暑い日々

◆こちら、暑い日が続いています。多くの人々が海岸や戸外に出ています。ニュージーランド人の大好きなことです。

◆政府は、トンガの火山噴火や津波による災害に最大限支援していますが、復旧には何年もかかるでしょう。

◆オミクロンの影響が広がり始めています。まだほんのわずかですが、対策が望まれます。過日、ファンガヌイへ行き、従兄弟のステイヴを短期間でも連れてこられて良かった。所により移動の制限がないとはいえ、皆が長旅を控えています。

◆有資格者のワクチン接種率は90%を超えています。ブースターワクチンが最大の課題です。夏休みが終わると新学年度、効果が期待されます。

◆シエークスピアパークでの楽しい散歩が続きます。最近の高温と雨不足で乾燥ですが、ヒツジたちの食事はまだ大丈夫。池にまた一輪睡蓮が咲きました。ハイビスカスはこの辺でどんどん咲いてきます。◆北見の皆さんにどうぞよろしく。

2022.2.11

◆ハイビスカスの写真が気に入られて良かったです。この辺は群生地、ハイビスカス海岸として有名です。

◆Tさんの手紙が返送されたとは残念へ注 宛名の番地忘れ。感謝をお伝えください。郵便事情も変化し、普通郵便は小包量の半分くらいになり、郵便局も昔ほど良心的な仕事をしなくなり、今は週3回の配達です。

◆札幌方面では記録破りの降雪で、これは酷暑に加え降雨で湿度高い天候。南島の西海岸ブラー地方のウェストポートでは住民が避難するほどで、さらに降雨予報です。◆コロナ規定に反対する人たちがウェリントンの国会議事堂前に集まっています。彼らの意向は自分たちの権利が法より上、のようです。それは他の人々の健康安全志向の権利を奪うことで、海外でもそんなことがあり、警官がされるがままになっているのは良くないメッセージを与えています。

◆北見の皆様方、オミクロンや寒さにもかかわらず、健康で元気でありますように。

2022.3.1

―今朝のメールありがとつこごいます。

◆札幌はじめ多くの地で豪雪気にかかっていましたから、音信を嬉しく思いました。北見が最悪に遭遇せず良かったです。

ったです。

◆新聞記事読むのが楽しみです。特に、オホーツク海の流水の記事などは。

◆こちらは暖かく湿度高い天候が続きます。昨日はアーミーベイでアジサシのダイビングを、オコロマイでは水面に飛びだす小魚も見ました。

◆追加ワクチン済みと聞いて安心しました。私や他の家族たちも終わっています。最近、オミクロン患者が劇的に増えて、接種率は上がって、入院率は低く止まっています。

◆日曜日(2/27)従姉妹のマーガレットが90歳の誕生日前に亡くなりました。ニュージーランドにいる5人の子供達に見守られて。来週には、ニュープリマスでの葬儀に姉と弟、私も参加します。オーストラリアと合衆国にいるもう二人の息子たちも来られると思います。マーガレットはわたしたち従兄弟姉妹の最年長で、優れた人生でした。健康でしたが、最近何ヶ月かを養老施設で過ごしていました。ハワード氏の北見滞在中に一度来北され、携わる事業の興味深いお話を伺った。◆辻村先生が亡くなられたとのこと、悲しく思います。奥様に哀悼の意をお伝えください。睡蓮の写真を送ってあげられたとのこと、良かったです。

◆今日午後、姉達のところまでディナーです。弟も合流します。北見の方々にどうぞよろしく。安全で健康でありますように。

2022.3.19

―ファンガヌイからの挨拶

◆写真やニュース記事ありがとうございます。北見にはまだ雪が多いですね。皆さんが温かく快適でありますように。

◆マーガレットの葬儀は本当にふさわしい儀式でした。コロナの状況下でも、子供七人と大勢の孫たちが集い、母親に対してはそれぞれに感動的な賛辞を述べました。私たち三人も列席できて本当に満たされた思いでした。◆美しい秋の天候になっています。水



曜日(3/16)にファンガヌイまで南下しましたが、来週木曜日(3/24)にはファンガバラオアへ帰る予定。これは全てが良い具合です。りんごや梨、マルメロが豊作です。まだ熟していませんが、マルメロと料理用リンゴを摘み、ステューにしました。

◆昨日従兄弟のステイヴとタイハペまでバックカントリードライブしました。全くの秋の日和で、あたり全体が素晴らしいかったです。ニュージーランドの田園そのもので、天国にいるような気分でした。ステイヴが、60年前の若い頃に牧童をしていたシープステーション(ヘヒツジの大牧場)へ連れて行ってくれました。当時とほとんど変わらない壮大な景観でした。写真送ります。

◆北見の皆様によろしく。

編集後記

この一年も新型コロナウイルスとの闘いで明け暮れたような一年でした。それに加えて本年2月24日から、ロシアによる悲惨な侵略戦争がウクライナで行われています。コロナ問題より心が痛みます。

嶋田言一氏からの寄贈品を公開する企画展を準備中です。約40万円の特注の展示ケースを製作し、「唐笠何蝶記念室」にて公開することになりました。理事一同、公開資料の整理作業に追われています。

新年度は、明るい話題でピアソン便りが編集できるように、と思っております。

(理事兼事務局長 伊藤 悟)